

日中両国市民の歌による平和構築

—「紫金草物語」を唄う人々の異文化接触を事例に—

M111892 三 川 平 作

1. 研究の背景

日中両国は、双方とも最大の貿易相手国であり、日系企業の中国進出数は約2万数千社、直接雇用者数も数百万人にのぼる。この40年間で両国の相互依存・補完関係は、貿易・投資等の経済面はもとより、人的往来においても拡大・深化してきた。しかし、2012年9月には、尖閣諸島問題が要因で、1972年の国交正常化以来、最悪の状態に陥り、国交正常化40年を祝う式典も中止となる等、日中双方に経済面のみならず、文化交流事業等にも大きな打撃を受けている。

それにもまして、昨今の世論調査では、これまで両国間の市民交流が促進されてきたのにもかかわらず、市民間の相互理解に改善が見られないことは、一層憂慮すべきである。

こうした状況を踏まえ、日中両国との関係を維持拡大する為には、揺るぎのない平和構築が大前提となる。その為の市民の役割と位置づけは、近年のインターネット環境の進化と共に今後益々重要性を帯びてくる。

メディア等を介して間接的に得られる情報が原因で、両国の国民感情に大きな影響を及ぼし、平和が脅かされる可能性があるならば、犠牲となりうる市民レベルから、問題意識を持ち、根本的な解決の糸口を模索すべきと考える。

2. 研究の目的

本研究は、日中間の政治情勢及び間接的なメディア報道等に影響されることなく、日中両国市民が互いに言語・文化・風習等の壁を越え、「歌」を介した直接的な異文化接触によるコミュニケーションが、どのような形で平和構築と両国市民の相互認識に影響と効果を及ぼしているかを、「紫金草物語」を唄う人々の事例研究及び中国現地のアンケート調査結果を分析することで明らかにする。

3. 異文化接触及び平和構築の捉え方

これまでの異文化コミュニケーション研究では、異国間の相違点や共通点、そして問題点を、個人、集団、組織、国家等を形成している人々の思考、言語、文化、習慣、行動等から比較分析したものが少なくない。本研究では、これまでの異文化コミュニケーション研究領域の枠組みを援用しつつ、平和研究との有機的な融合の必要性を主張する。そして、日中両国市民の歌による直接的な異文化接触が相互理解を生み、平和構築の継続的なプロセスに重要な役割を担っているという仮説を検証する。

4. 事例研究とアンケート調査分析

事例研究では、南京市で「紫金草物語」を唄う人々を取り上げ、南京市民との異文化接触を通じた平和構築活動の影響と効果について考察し、それを裏付ける意味で、南京市内の4大学及び北京、大連市民を対象としてアンケート調査を実施した。その結果、多くの市民が、日本メディア報道の客観性に関する判断が難しく、日中関係の情報源は自国のメディアに依拠している状況であることがわかった。また、自由記述式アンケート結果を帰納的に抽出した結果、「紫金草物語」を唄う人々の平和活動に対する評価が認められ、同時に事実に基づく歴史認識を強調する内容が多かった。これらの調査結果から、仮説として立てた「紫金草物語」を唄う両国市民の直接的な異文化接触による平和構築活動が、両国の相互理解に重要な役割を担っていることが立証された。

5. 結論

日中両国市民の草の根による継続的な平和構築活動が、地元市民のみならず、政府やメディアにも影響と効果をもたらしていることから、権力を持たない一般市民であっても、歴史認識の共有化により平和構築の一翼を担うことは十分可能である。歴史認識こそがすべての原点であり、平和を築くうえで欠くことのできない要素である。日中双方の「共益」はここから生まれるといっても過言ではない。本研究は、グローバル化の流れに沿って急速に発展してきた比較的身近な研究分野としての異文化コミュニケーション研究領域と、国家を主体とした紛争、軍事、平和構築、復興支援等を題材とする平和研究の領域を拡張させ、有機的に融合させた異文化間における人々の平和研究の重要性と可能性を指摘し、市民を主体とした平和構築の今後の方向性を示した。

6. 課題

こうした市民による平和活動は、すべて自己負担であり、参加者の高齢化による世代ギャップもある。このような状況下で、事実に基づく客観的な歴史認識を浸透させ、賛同者を増やしていく具体的な施策を提言をしていく必要がある。そして、異文化コミュニケーション研究領域を拡張させた日中両国市民の「歌」と「平和」の視点から、平和に関連する歌の背景や、その歌の音楽的な特徴を理論的に明らかにし、大衆から生まれた歌が、人間の相互作用にもたらす効果についての検証も、今後の研究課題となる。